

## ごぞんじですか? 第91回 RDAがやってくる

### 1 はじめに

“Anglo-American Cataloguing Rules(以下AACR2)”は2012年6月に改訂されて“RDA: Resource Description and Access(以下RDA)”と名称が変わりました。日本でも国立国会図書館が2013年4月から外国刊行の洋図書等についてRDAを適用している<sup>1)</sup>ほか、NACSIS-CATで利用している参照ファイルのレコードもRDA対応になってきていますので、日頃の業務でRDA対応のレコードに接することも増えているのではないのでしょうか。もちろんNACSIS-CATそのものも、いずれは準拠する目録規則としてRDAを採用するだろうと思われます。さらに『日本目録規則』もRDAを参考にしたものへと改訂作業が進められています<sup>2)</sup>。

このように身近になってきたRDAについて、本稿ではRDAが目指す目録のあり方がどのように変わったのかということ、RDA講習会の内容をご紹介しますながら考えてみたいと思います。

### 2 RDA講習会

#### 2.1 実施状況

RDAが公開された後も、2012年秋の時点では日本語でRDAについて解説している書籍はなく<sup>3)</sup>、研究者による論文はあるものの、予備知識の無い現場のカタログガーにとってわかりやすく解説した情報はありませんでした。RDAはその背景に「書誌レコードの機能要件(以下FRBR<sup>4)</sup>)の考え方がありますが、このFRBRに関する説明はRDAそのものの中ではごく簡単にしか触れられていません。そのため、FRBRの知識が無い状態でいきなりRDAを読んでも理解する事は難しいと思われます。そこで筆者が所属するNPO法人大学図書館支援機構(以下IAAL)では、図書館にいる現場

の方を対象にして、2012年12月よりRDA講習会を実施しています。

最初の講習会は全体を3回(各2時間)に分けて実施しました。実施時期とおよその参加人数は以下のとおりです。

第1回: 2012年12月15日(90名)

第1回追加: 2013年1月26日(60名)

テーマ: プロログ: RDAとはどのようなものか

第2回: 2013年3月9日(120名)

テーマ: RDAをカタログガーの視点で読む①  
属性の記録

第3回: 2013年5月11日(120名)

テーマ: RDAをカタログガーの視点で読む②  
関連の記録

この間、地方での開催を希望する声も頂いていましたが、会場確保や受付対応などの問題があり、地方に支部を持たない現在のIAALでは単独で地方で開催する事は困難でした。そのような状況の中で丸善株式会社が社内研修としてRDA講習会を実施するという話がありましたので、IAALが共催となって外部の方にも門戸を開放する事にしました。なお、地方での開催にあたっては、双方の負担を軽減するために全2回の開催(札幌は全1回)としました。

IAALが共催となった講習会の実施時期と場所および参加人数は以下のとおりです。

福岡(60名)

第1回: 2013年9月7日

第2回: 2013年10月5日

札幌(25名)

全1回: 2013年9月14日

大阪(70名)

第1回: 2013年9月28日

第2回：2013年10月19日

これ以降も2014年3月15日に東京にて、同じく丸善株式会社主催・IAAL共催での講習会を予定しています。

さらに2013年2月23日に丸善名古屋の社内研修に、2013年12月16日には東北大学の職員研修に講師を派遣したほか、2014年2月22日と3月9日には大学図書館問題研究会京都支部のワンディセミナーの一環としてRDA講習会を実施します。

## 2.2 目的と対象者

講習会の目的は、それだけを読んでも分かりにくいRDAを予備知識の無い方にも分かりやすく紹介する事です。当初はカタログ向けに限定しようという考えもあったのですが、そもそも目録はカタログだけに関係するものではないため、広く図書館関係者を対象と考えることにしました。その上で実際に目録を扱う立場でRDAを理解する事を目的としています。

## 2.3 講習会の構成

AACR2からRDAへの改訂では、記述の仕方にとどまらず、資料の捉え方や目録情報に対する考え方そのものが大きく変わっています。

まず資料の捉え方ですが、これまでの資料種別に基づく考えから、著作-表現形-体現形-個別資料というFRBRの実体に基づくものへと変わりました。そのため、AACR2では資料種別ごとに章を立てて規定していましたが、RDAでは著作-表現形-体現形-個別資料という実体ごとに、それぞれの属性と関連を記録することを規定しています。これは、多様な種類の資料についてそれぞれ孤立した目録を作成するのではなく、資料種別に関わらず、関連する資料を相互に関連付けて扱うというFRBRの考え方によるものです。

そのため、まず最初にFRBRの概念モデルを解説したくなるのですが、RDAについて知りたいと思って講習会に参加した方にとっては、いきなりFRBRを説明されてもそれがRDAとどのような関係があるのか、その必然性を実感しにくい

のではないかと考えました。さらにRDAの考え方はFRBRのものとまったく同じというわけではありませんので、まずFRBRを学んでからRDAを学ぶのでは二度手間でもあり混乱もすると思われる。そこで講習会では、FRBRは扱わず、初めてRDAに触れる場面を想定して、その思考の流れに沿ってRDAそのものを解説することにしました。

具体的には、冊子体を手に取ったと考えて、まず外観について説明します。AACR2より厚い事、バインダーが付属していない事、また基本的にRDA-Toolkitとして公開されている事などを紹介します。(初版ではアメリカ式の3つ穴のルーズリーフだったのですが、2013年秋の改訂版では、全部で7つの穴が開けられていて、日本の2つ穴のバインダーも使用できるようになっています。)

その後で目次を見て、AACR2の目次と比較してずいぶん違っていること、見慣れない語句、すなわち「著作」「表現形」・・・「属性」「関連」など、が並んでいる事を確認します。その後でこれらの語句について解説することで、RDAにおいて「著作」などや「属性」「関連」などの概念が重要であることを感じて頂けるものと考えています。

また、本来は目録カードを使用した所蔵目録を作成するためのAACR2を、現在は既にデータベースへの入力に使用していること、RDAは記録媒体に左右されない規定となっている事を紹介します。

それに関連して、いわゆる区切り記号が規定されなくなったことも紹介します。AACR2で規定されていたフィールド間やその中のエレメントごとの区切り記号は、平面である目録カードに記述する際に必要なものでした。しかし書誌情報をデータとして入力する場合には、それぞれのエレメントに対応した入力フィールドを持つ事が多く、区切り記号が必要でない事もあります。そこでRDAでは区切り記号を規定せず、個々のデータそのものを規定することに限定しています。その結果、データを表示するときの自由度が高くなりました。例えばCiNii Booksでは検索結果を表示する

画面で、出版者と出版地を異なるエリアに表示していますが、このようなことが容易になります。

また、冊子体の目録にせよ目録カードにせよ、限られたスペースに必要な情報を効率的に記述するために、いろいろな略語が使用されてきました。例えば出版地不明はラテン語の「Sine loco」を略して「S.L.」としていますが、このような略語は予備知識の無い一般の利用者がすぐに理解できるものではありません。そこでRDAではこのような略語を使用しないようになりました。

記録する数についても省略がありました。同じ役割の責任表示が4人以上ある場合は1人だけを記録して、残りは「…[et al.]」と省略しました。RDAではこの省略も行わず、情報源にあるものをそのまま転記するようになりました。このように、目録カード時代のスペースの問題からの解放と利用者にわかりやすいデータを作成するというのもRDAの大きな特徴の一つです。

その後はRDA本文の規定を読んでいくのですが、前半の属性の記録と後半の関連の記録のどちらを先に解説するのかについても悩みました。というのは、RDAの構成としては属性の記録が先なのですが、それぞれの実体の性質について知るためには、実体そのものについて詳しく見ていくよりも、他の実体との関連を先に説明した方が理解しやすいのではないかと考えたためです。悩んだ挙句、講習会後にRDAを読むことを考えると、目次どおりにしておいた方が良いのではないかと考え、RDAの順に解説しています。しかし全2回版では、時間配分の都合もあって関連を先に解説することにしました。どちらを先に解説するにしても、あらかじめ実体関連の全体像を把握した方が理解しやすい事には変わりありません。そのため、先に全体像を説明し、その後で個々のそれぞれの規定を細かく見て、さらに必要に応じて全体像に立ち返るという、全体と部分の説明をうまく組み合わせる方法が効果的であると考えています。また関連を解説する際には現在のNACSIS-CATのリンクを例に挙げる事で、関連を記録するということがイメージしやすくなると考えてい

ます。

最後に、目録情報が、AACR 2が想定していた所蔵目録から、情報資源にアクセスするためのツールへと変わってきたことを紹介しています。その一つの表れが次項で述べる関連の重視です。

### 3 RDAのレコードの特徴－関連の重視

RDAではFRBRの考え方にもとづいて、記述対象を三つのグループに分けています。知的・芸術的活動の成果である第1グループと、第1グループの内容や製作・頒布、管理に責任を持つ第2グループ、そして第1グループの主題となる第3グループです。さらに第1グループには、著作、表現形、体現形、個別資料という四つの実体があり、第2グループには個人・家族・団体という三つの実体、第3グループには概念・物・出来事・場所という四つの実体があります。(この第1グループの概念モデルがFRBRであり、第2グループの概念モデルがFRAD(典拠データの機能要件<sup>5)</sup>)、第3グループの概念モデルがFRSAD(主題典拠データの機能要件<sup>6)</sup>)です。これらは別々のワーキンググループで議論されたため、例えばFRBRでは第2グループを個人と家族の二つの実体としたのに対して、FRADでは家族を追加して個人・家族・団体の三つとしたり、FRBRでは主題を実体との関連で表わしたのに対してFRADでは著作の属性としたりと、若干の相違があります。つまりRDAはこれらの概念モデルから機械的に導き出されたものではなく、これらを参考にした上で改めて一つの目録規則として具体化したものであると言えます。)

そしてそれぞれの実体の特徴を記録するのが「属性の記録」であり、実体どうしを関連付けるのが「関連の記録」です。AACR 2が前提としていた目録カードでは、書誌のカードと典拠のカードを別々に作成・管理していましたが、RDAではこれらの実体を関連付けることになりました。関連付けておくことで、ある著者が著わした著作をすべて表示させたり、ある著作に関連する著作をすべて表示させることが可能になるのです。

図1は「かぐや姫」に関するレコード構成の想像図です。この図を使って、利用者がどのように求める資料にたどり着くようになるのかを想像してみましょう。

例えば「かぐや姫」というタイトルで検索したとします。すると著作レコードとして「竹取物語」や高畑勲監督の「かぐや姫の物語」が表示されます。そして竹取物語には、日本語のテキストや日本語の朗読、英語のテキストなどの表現形があることが示されます。日本語のテキストが読みたければ、岩波文庫や角川文庫の体現形があることが示され、それぞれの個別資料を表示すればどこにその資料があるかを知ることができます。

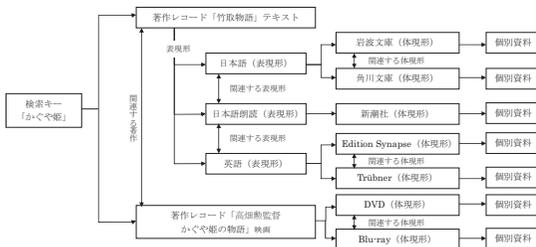


図1 「かぐや姫」に関連するレコード構成(想像図)

ここでは単純にするために第1グループについてだけ描きましたが、それぞれの著作は著者や監督の典拠レコードと関連づけられていて、その著者や監督の別の作品を表示させることもできるようになります。さらに図書館における書誌や典拠のレコードに限らず、インターネット上のさまざまな情報資源と関連付けることで、インターネットというより広い情報世界を組織立てて活用できる可能性があります。これが先に述べた、所蔵目録から情報資源にアクセスするためのツールへと変わった、というRDAの大きな特徴です。

NPO法人大学図書館支援機構  
蟹瀬 智弘 (かにせ ともひろ)

引用文献・注

- 1) 国立国会図書館. 2013年4月から洋図書等にRDAを適用します. NDL書誌情報ニュースレター. 2013, 2013年1月号. [http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/bib\_newsletter/2013\_1/article\_03.html], (参照2014-02-10)
- 2) 国立国会図書館. “新しい『日本目録規則』の策定に向けて”. 2013-09-30  
http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/newncr.pdf(参照2014-02-01)  
日本図書館協会目録委員会. “『日本目録規則』改訂におけるNDLとの連携について”. 2013-09-30  
http://www.jla.or.jp/Portals/0/data/iinkai/mokuroku/renkei.pdf(参照2014-02-01)
- 3) 2月10日に、上田修一・蟹瀬智弘. RDA入門：目録規則の新たな展開. 日本図書館協会, 2014年, 205p, (JLA図書館実践シリーズ, 23)が刊行されました。
- 4) IFLA Study Group on the Functional Requirements for Bibliographic Records. 書誌レコードの機能要件：IFLA書誌レコード機能要件研究グループ最終報告. 和中幹雄ほか訳. 日本図書館協会, 2004, 121p.  
http://www.ifla.org/files/assets/cataloguing/frbr/frbr-ja.pdf(参照2014-02-01)
- 5) Patton, Glenn E. 典拠データの機能要件. 国立国会図書館収集書誌部訳. 国立国会図書館, 2012, 72p. http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/frad\_jp.pdf(参照2014-02-01)
- 6) IFLA. “Functional Requirements for Subject Authority Data (FRSAD): Final Report”.  
http://www.ifla.org/en/node/1297(参照2014-02-01)FRSADの邦訳はまだありません。